



女権国家シリーズ

ひなと
雛翔先生の
ふたなり学級
教育実習記

20XX年。行き過ぎた差別撤廃運動は留まる事を知らず、日本は完全に女性上位の社会となっていた。

今や法的にも社会的にも男性は完全に女性より劣等な生物とされ、教育や就職、家庭での生活においても女性より低い扱いを余儀なくされていた。

ここ英雀女子△学校は、そんな社会体制の元に数年前設立された私立の学校で、国の将来を担う優秀な女性を育てる為のエリート校である。

当然、教師陣も授業の指導力はもとより、社会においての女性の重要な立場を生徒達に教え込む事ができる、優秀な女性のみが採用されている。

ところが、本日ここに開校以来初めての男子(男性という言葉は近年は滅多に使用されない)教育実習生が赴任してきたのである。



実習生の名は愛崎雛翔（ひなと）。

変わった名前だと思おう向きもおられるだろうが、この時代では男の子に花・姫・雛などといった可愛らしい漢字を使用するのは当たり前である。

逆に女の子には今の時代とはうって変わって、勇ましい漢字を使用することが普通なのだが、それについては後述する事になろう。

彼は男子としては破格に優秀だということで、極めて例外的に英雀女子△学校での教育実習を申し渡された。

もちろん、あくまで男子として優秀というだけで、そもそも男の子が大学に行く事自体が珍しい時代なのだ。

この日、雛翔は購入したばかりの男子用スーツに身を包み、引き締まる思いで英雀女子△学校の教員室にやってきた。



「お久しぶりだね。雛翔お兄ちゃん」

雛翔の指導教師は名須川将奈(しょうな)。まだ若い
既にこの学校で二年の教師実績がある。前述したように
この時代、強く丈夫に育つように、女の子にはこのような
勇ましい名前をつけるのが普通なのだ。

「よ、よろしく……将奈ちゃん」

実は二人は幼馴染みで、将奈の方が四つ下の年齢である。
男子の方が遅れて義務教育を開始し、低能故に女性よ
りも長くかけて卒業するのが当然であり、尚且つ将奈は
飛び級までしているのだから、社会に出るのに差がついて
しまったのは当たり前だった。

「なかなか、優秀な成績なんです」

将奈は雛翔の紹介書類を見ながら笑みを浮かべた。

「あ、ありがとう」雛翔はぎこちなく笑い返す。



「ありがとうございます」だろ、ボケナスッ！」

突然叱責された雛翔は身を縮込ませる。

「いいか？　ここは学校じゃないんだ。お前はもう社会人なんだよ。先輩に対して、女性に対して身の程を弁えろ！」

「は、はいっ！　申し訳ありませんでした」

雛翔は神妙に頭を下げる。以前はお兄ちゃんと呼んで慕って来ていた女の子にこんな風に言われるのは屈辱だが、将奈の言うことはもつともでもあった。

「ところでなんだお前、その服装は？」

「は、はい。なにかおかしいところか……」

よく見ると雛翔のスーツはだぶだぶである。それは標準的な男子用スーツだったが、彼は人一倍小柄な体格で、男子用の品揃えが少ないこの時代では合うサイズが無かったのだ。



「男子実習生のくせに生意気だ。これに着換えてこい」
将奈は既に用意してあった一着の衣類を渡す。

「は、はい……分かりました」

雛翔には断る権限など無い。だが、数分後その衣類に袖を通した彼は恥辱の表情を隠せなかった。それはどう見ても小学校の男子制服だったのだ。

「うん、とても似合ってるぞ。サイズもぴったりじゃないか」
将奈に笑われ、雛翔は益々顔を赤くする。

「で、でも、これじゃあ生徒達に示しが……」

これでは教師としての威厳が保てないのでは無いだろうかと心配した雛翔は小さな声で逆らってみた。

しかし帰ってきたのは冷たい言葉だった。

「馬鹿かお前は。誰も男のお前にそんな事は期待してないんだよ」





「そ、そんな……」

「いい？ 男であるあなたが、この優秀な女生徒が通う英雀女子に実習に来たのは、男子がどこまでやれるか試してみようという試験なのよ」

将奈は少し和やかな雰囲気に戻る。

「そ、そうなんですか……」

「ええ、男のあなたが女社会の中でどうやって結果を残すか試されているの。雛翔、あなたそんななりでも男としては優秀だったんでしょ？」

「あ、はい……一応男子大学ではですけど……」

「なら、期待されてるんだから頑張りなさい。言っておくけど知り合いだからっていつて遠慮はしないわよ。先輩教師として厳しく躾けるからね」

「は、はいっ！」

雛翔は少し気を取り直して元気良く返事した。

だが彼は知らなかったのだ。自分が何の為にこの学校に呼ばれたのか、その真の理由に……。

将奈と共に雛翔が担当するのは四年生だ。しかしその日、雛翔の実習は見学だけで終わった。彼は教壇で生徒に紹介されたのみで、後は将奈の授業を見ているだけだったのだ。授業のレベルは実に高く、雛翔は早くも自信を失いつつあった。

その後、教員室に戻り今日のレポートを書いて、将奈にチェックしてもらっては何度もだめ出しをもらう。

「こんな簡単な漢字も間違っつて、よく教師になりたいなんて思ったわね」

「成績優秀つて言ってもやっぱり男子は男子ね。これならうちの生徒の方がマシかもしれないわ」

「やっぱり小学校の制服着せておいて良かったわ。ねえ、もう一度小学校からやり直す？」

そんな風に年下の女子からプライドをずたずたにされたが、一応は問題無く雛翔の初日は過ぎていく筈だったが：



だが帰ろうとした時、彼は職員用の靴箱に自分への手紙を見つけてしまったのだった。

『愛崎先生、放課後教室に来て下さい』

将奈に相談しようかと思ったが、彼女は職員会議で不在だった。

迷ったあげく、彼が担当の教室に恐る恐る足を運ぶと、待っていたのは、数人の生徒達だった。

「先生、お待ちしましたわ」

生徒を代表して貴志川烈乃（れつの）という生徒が挨拶する。彼女は圧倒的成績優秀の学級委員長であり、学園オーナーの孫でもあると将奈に聞かされていた。

「き、君たち……もう下校時間はとっくに過ぎて……」

一応は教師らしくしけないといけない。雛翔は緊張しながら生徒達に下校を促した。



「問題ありませんわ。この後、執事の車で全員を送ってさしあげますから」

烈乃はお嬢様らしい堂々とした態度で雛翔の前に立ちはだかる。

「まあ、烈乃様の方が身長が高いですわね」

クスクスと笑ったのは花小路雷愛（らいあ）というボブカットの女の子だ。その口調からして、彼女は烈乃の友人、いや、取り巻きのようだ。

「この分では、あれも烈乃様の方が大きいんじゃないですか？」

雛翔はドキリとした。噂には聞いていたが、この学校の少女達には、やはりアレがついているのだろうか。

「先生、比べて下さる？ 私とあれの大きさを」

「で、でも……」

「あら？ 自信が無いのですか、男の癖に」



「そ、それは……」

烈乃の言うとおり、いくら女尊男卑の世の中になってもアレを生やしているのは男だと生物学上は決まっている。

だが雛翔は聞いていた。この学校に通う女の子の大半はペニスを持っていると……

「恥ずかしがることはありませんわ。やはり教師と生徒は裸のお付き合いをしませんと」

烈乃がそう言つてスカートを捲つたので雛翔は驚いた。

「だ、だめ！ 教師と生徒でこんなことを！ わっ！」

必死に眼を手で隠して抗う雛翔だったが、雷愛が彼のズボンをずり下ろしてしまふ。

「うわあ、全然違う！」

二人のサイズの差を見て大きな声を上げたのは、御手洗焰香（ほのか）というツインテールの女の子だった。



うつすらと眼を開けると、烈乃の股間には雛翔のものは比べものにならない立派なペニスがぶら下がっていた。

「うわあ、ホントだ、全然違えな」

狩俣虎子（とらこ）という少しボーイッシュな少女が二人の股間を覗き込む。

「俺も自信あるけど、烈乃はまた大きくなったんじゃないやね？」

（この娘もふたなりなのか……）雛翔は震え上がる。

「ところで、先生。その股間についてるものがひよっとしてペニスなんですか？」

雛翔は答えられずに俯く。

「初めての男の先生だと聞いて期待したのですが、がっかりですわ。これならまだ下級生の娘の方が立派ですもの」

烈乃が勝ち誇ったように言い放つ。

「これで上下関係は、はっきりとしましたわね」



「い、いや……上下関係ってこれの大ききで決まるものじや……」

雛翔は必死に言い訳しようとするが、空虚なだけだった。それどころか、烈乃のペニスが徐々に首をもたげてくる。

「先生の無様な短小包茎ペニスを見てると、なんだか興奮してきましたわ」

(あれでまだ勃起していなかったのか！)

雛翔の驚きをよそに烈乃のペニスはどんどんとその大ききを増し、雛翔のペニスの先にちよんと触れ合ってしまった。

「あら、先生も勃起されてるのかしら？」

見れば気づかない間に雛翔のペニスも、サイズの変化は分からない程度ながらも角度を上に向けていた。

「生徒のチンポに負けた事で興奮してしまったのですか？先生はマゾなんですね」





烈乃に笑われ、雛翔はズボンをはき直してしまった。「敗北を認めるんですね。でも、その小学校の男子制服にお似合いのおちんちんでしたよ」

焔香が追い打ちを掛けるように言う。「しかし、その服装ではまるで男の子みたいですわね」「えっ?」烈乃の思わぬ言葉に雛翔は怯える。「そんな小さなペニスの持ち主が男性だと思いたくありませんわ。お着替えしましょうか」

「や、やめて! やめろおっ!」

抵抗する雛翔だったが、自分より大きい四人の生徒には全く敵わない。彼は小学校制服のズボンを脱がされ、同じく小学校の女子制服の吊りスカートを穿かされてしまった。「やはり、こちらの方がお似合いですよ。さあ、もう一度比べてみましょうか」

スカートを捲られ、再びペニスを重ねると烈乃がその先を擦り合わせる。そのうち、二人の龟头から透明の液が流れ始めた。

「まあ、女の子の洋服を着せられて興奮しちゃったのね」
「良かったわね。男の癖に女の子の制服着せてもらえて」
「先生の情けない顔見ていたら、私も興奮してきちゃった。
先生、責任とって下さりますか？」

烈乃はそう言って、何度も何度もその凶悪なペニスの亀頭を雛翔の小さな包茎おちんちんの先っぽに擦りつけてくる。雛翔だって一応は男性である。そのように刺激されれば興奮している状況でないのは分かっている、自然に勃起してカウパーをたれ流してしまう。

「これでご自分の立場が理解できたかしら？自分が教え子の、それも女の子のペニスに蹂躪される惨めな存在だって」
「ち、違う……それでも僕はせん……せいに……」

「強情ですこと。でも、その方がこれから楽しみですわね。さあ、皆さん。帰りましょうか」
「えっ!?!」

一人教室に残された雛翔は悶々とした気持ちを下半身に抱えたまま、明日からの実習に怯えるのだった。



翌日は雛翔の教育実習デビュー日であった。

「み、みなさん。こんにちは」

教壇に立って生徒達に自己紹介する雛翔。しかし教え子達からは挨拶の返答どころか嘲笑が巻き起こる。

それも仕方無い。彼は昨日のスーツではなく、ピンク色の女兒用シャツと同じくピンクと水色の二段になったふりふり女兒用スカートで教壇に立たされていたのだ。」

その日、出勤してきた雛翔は校門の前で待ち受けていた烈乃と雷愛に囲まれてしまった。

「先生、おはようございます」

「お、おはよう」

「昨日はよく眠れました？」

「おうち帰って、自分でぴゅっぴゅっしたんだよね」





「まあ、雷愛さん。はしたないですわよ」

「でも雛翔先生ったら、烈乃様のペニスに蹂躪されて、あんなに勃起されてたんですもの。放置して帰って悪かったかなって思ってたんです」

「それもそうですわね。ねえ、先生。昨日、私のペニスを思い出して自慰なさりましたか？」

「お、大人をからかうんじゃない」

「まあ、ご立派な事」

ひとしきり笑った後、二人は大きな紙袋を雛翔に差し出した。

「今日からはこの服を着て授業して下さいね。もちろん逆らったらどうなるか分かりますわね」

そのような訳で雛翔はこのような姿で教壇に立たされてしまったのだ。

もちろん雛翔としては恥辱に満ちた決断だったが、烈乃は学園オーナーの孫でもあるのだ。昨日の事を暴露されれば教師の道が閉ざされるだけでなく、女性敬仰法に触れて最悪、去勢・収監されてしまうかもしれない。

彼は授業前にトイレで着換え、渡された服で授業に臨むしか無かったのだ。

「お前がここまでバカだとは思わなかったぞ」

指導教師の将奈は出席簿で雛翔の頭を強く叩いた。

「こ、これには理由が……」

「よおし。言ってみろ」

「そ、その……」

だが、将奈に本当の理由など話せる訳が無かった。

「せ、生徒と同じ気持ちになって、教えられる立場から指導ができればと……思ったんです……」



「ほほお。立派な事を言うじゃないか。しかしだ……」

将奈は雛翔の着ている女児服を指で摘みながら叱る。

「男子のお前が子供服とはいえ、女性の服を着るといのは生意気じゃないか？」

「そ、それは……」

「まあ、私のような女性用スーツを選ばなかったのは褒めてやってもいい。もしそんな服装をしてたらこの場で素っ裸にして学校から追い出してやるところだ」

雛翔は震え上がる。

「しかし上手く化けたものだ。これならうちの生徒としても通用するくらいだ。ところで……」

将奈は雛翔のスカートに手を伸ばす。

「ところでお前、下着はどうした。下着だけ男物だなんて半端な事をしていないだろうな」



「まあっ!」「きゃあっ!」「かわいいっ!」

将奈がスカートを捲り上げると、生徒達からそんな歓声が沸いた。雛翔が穿かされていたのは、小学校低学年が喜ぶようなフロントプリントの可愛らしい女兒ショーツだったのだ。

「このクラスの生徒でも幼稚すぎて恥ずかしがるようなパンツを穿いてきた勇氣は認めてやろう」

将奈は大声で笑ったあと、生徒達に向き直った。

「後はこいつらの判断だ。お前がこんな格好でこれからの教育実習に挑むのを許してもらえるかどうかな」

「は、はい……」

「はいじゃねえよ。お前からお願いするんだよ。自分が男の癖に背伸びして女の子の格好で授業していいか、目の前の教え子に頼むんだよ」

「そ、そんな……」



自ら望んだ訳でも無い恥ずかしい洋服でこれからも授業をする事をお願いしなければならぬ屈辱に雛翔は打ち震えた。

「み、みなさん……ぼ、僕はまだ未熟な先生見習いですから、大人のような格好はできません……」

雛翔は将奈に認められるように、必死に考えた言葉を話す。

「だ、だから、男子の癖に生意気ですが、み、みなさんと同じような洋服でお勉強をさせて下さい……」

「まあ、いいんじゃない？ 可愛いし♥」

虎子の言葉に教室が笑いの渦に包まれる。

「私も努力家の先生は嫌いではありませんわ。でも、そのような幼稚なお洋服で、私達と同じようなとは、言わないで下さるかしら」

自分から着せたのにも関わらず、学級委員の烈乃の辛辣な一言によって雛翔はこれからも女兒服で実習をする事になってしまったのだった。



「せんせえ、やっぱ可愛いじゃん♥」

次の日の休み時間。雛翔は複数の生徒達に女子トイレに連れ込まれた。女子校であるこの学校には元々男子トイレは存在しないのだから、ある意味それは仕方の無い事だったのかもしれない。

「女の子の服着てるんだから、遠慮しなくていいよ。トイレでの女の子の作法も知っておいた方がいいだろ？」

率先したのは元氣者の虎子だった。

「で、でも……こんな事が将奈先生に知れたら……」

「心配すんなって。雛翔先生が大人しくしてたら、あたし達だってチクったりしないからさあ」

虎子は雛翔の首に腕を回して耳打ちする。

「その代わり、ちよつと言うこと聞いてくれるかな？あたし達思春期だから大変なんだよねえ」



一体何が大変なんだろうか。雛翔は訝しがりながら
虎子・烈乃・雷愛・焔香の四人に拉致されるように女子
トイレに連れ込まされてしまった。

「今日のお洋服も似合ってますわ。女兒服は沢山ありま
すから毎日着換えさせるのが楽しみですわね」

「雷愛ったら、先生を着せ替え人形だと思ってるのね」

今日の雛翔の洋服は、水色のプリントシャツ、裾にレー
スのついたピンク色チェックのプリーツスカート。パステル
カラーの柄物の膝上ソックスにリボン柄のマジックテープ
式のスニーカーといった出で立ちだ。

「さあ、そこに座って下さい。汚くないですよ、清掃業者の
方が毎日綺麗に掃除して下さってますから」

焔香に言われ、雛翔が仕方無くトイレの床に腰を下ろ
すとスニーカーの靴底の可愛い模様が見える。





「もうたまらないわ!」

ツインテールの焰香が雛翔の傍に立ち、スカートを捲ると、そこには既に勃起した陰茎がそびえたっていた。

(この娘もふたなりだったんだ!)

雛翔は怯えた。話には聞いていたが、そんなにふたなり率が多いだなんて思ってもいなかったのだ。

「焰香ちゃん、最初は烈乃様でしょ」

「ううん……仕方ないなあ……じゃあ私は手で我慢するわ」

雷愛に言われ、焰香は雛翔の手をつかみ、無理矢理自分の陰茎を握らせる。自分以外のものに始めて手を触れた雛翔は頬を真っ赤に染めた。

「先生の手、気持ちいいわ。ほら、もつとぎゅつと握って」

言われるままにすると、雷愛のペニスで雛翔の手の中で硬さを増していく。



(僕の手で興奮してるのか……)

屈辱的な状況ながらも、雛翔はなんだか不思議な感覚に囚われてしまう。

「さあ、先生こっちもお願いしますわ」

気がつけば目の前で烈乃が一昨日にも見た巨大な陰茎を露出させていた。

「一昨日から我慢してましたから、もうおちんちんが疼いて堪りませんの…やだ、わたしたたら下品な……」

雛翔は仕方無く、もう片方の手を烈乃の物に伸ばす。

「違うでしょ。烈乃様のは口でしなさい！」

たちまち雷愛が雛翔を叱責する。

「く、口で!?!? そ、そんなの……」

流石に雛翔が躊躇していると、烈乃はもう待ちきれないといった様子で無理矢理彼の口にペニスを押し込んできた。

「んぶっ！」

突然口を塞がれ、雛翔はおかしな悲鳴を上げる。

「歯を立てたら殺しますわよ」

そんな風に言われれば、もうそのペニスから口を離す訳にはいかなかった。烈乃の陰茎は益々雛翔の口の中で硬くなっている、彼の口内をオスの匂いで満たしていく。

「なあ、あたしのも握ってくれよ」

気がつけば、虎子までもがショートパンツのジッパーを緩めてペニスを露出させていた。

「美味しそうにしゃぶるのを見てたら我慢できねえよ」

烈乃のサイズには負けるが、雛翔のお子様おちんちんよりは遥かに立派なそれを彼は左手で握り締める。

「両手に花ですわね。どう？ 同時に三本のペニスに蹂躪されるお気持ちには？」





スカートと女児用パンツの中から突き出されるペニスに
雛翔は必死に奉仕する。

「ほら、もつと強く握って上下に振りなさい」

「舌先で転がすように亀頭を舐めて下さい」

「おつ……おおつ……先生、案外上手いじゃん」

やがて三本の陰茎は段々と大きさと硬さを増していき、
今にも爆発しそうに血管をドクドクと鼓動させてきた。

「もう出そう！ 顔に出すから動かないで下さい！」

「あ、あたしも出るよ！ 顔背けんなよ！」

「では、皆さん。一斉に出してしまいませんか。言われ
なくても分かるかと思いますが、吐いたりしたら矯正所
送りにしてあげますわよ」

矯正所というのは、この時代において女性に対して罪を
起こした男子が収監される強制収容所だ。

その恐ろしい実体を知っている雛翔は、烈乃の陰茎を啜
えたまま、必死に頷く。



「んっ!!」 「ああっ!!」 「んあっ!!んあっ!!」
三人の少女は一齐に雛翔の顔と口内に大量の精液を撒き散らした。顔面を生臭い匂いの白濁液に塗れさせられ、口中を勃起した陰茎と精液に満たされた雛翔は、気持ち悪さと吐き気で泣きそうになった。
「すっきりしましたわ。まだ吐いてはいけませんよ」
ゆつくりと雛翔の口から陰茎を引き抜くと、烈乃は彼の口の中を覗き込む。「はい、あーんして」
中には泡まみれになった烈乃が出した精液がたっぷりと溜まっている。
「ではお口をくちゅくちゅつと、何度も噛みましようね」
言われた通りにすると、口の中に余計に臭い匂いが満ちていく。我慢しきれなくなったその時、烈乃が命じた。
「はい、もう飲んでいいわよ」 「ごくくん」
雛翔は気持ち悪さから思わずその命令に従ってしまった。
「はい、よく私の精液飲めましたわね。偉いですよ」
烈乃に頭を撫でられ、雛翔は不本意ながらも自分が勃起している事に気がついてしまったのだった。

それからも雛翔は毎日女子トイレで生徒達の性欲処理をさせられるようになった。

ただ一人ふたなりで無い雷愛を除いて、三人の性欲は驚くほど盛んで、雛翔は毎日異なるペニスを味わわされる羽目になった。

フェラしたペニスからの精液を飲むのは決まりで、四日目からは目隠しをされて誰の精液かを当てさせられたりもした。間違えば口の中に出された精液だけでなく、トイレの床に飛び散った精液までも舐めさせられるのだ。

それは本当に屈辱的な行為だったが、当てる事が出来た時に雛翔は何故かゾクゾクした不思議な喜びを感じてしまふのだった。

そんなある日、体育の授業中に彼は烈乃と雷愛に今度は保健室に連れ込まれてしまった。



「先生はブルマもお似合いで羨ましいですわ。私達ったらペニスや陰囊が大きくて、どうしても股間が膨れてしまいますもの。その点先生は、おちんちんが小さいからブルマを穿かれても股間はすっきりですものね」

烈乃はそう言うと、保健室のベッドに雛翔を四つん這いにさせた。

「まあ、綺麗なお尻。ちよつと嫉妬しますわね」

雷愛が突き出された雛翔のお尻をブルマの上から撫でる。

「では、脱ぎ脱ぎしましょうね」

「あつ……ちよつと……何を……」

言われるままにされながらも、恐怖を感じた雛翔が抵抗する。

「心配ないですよ。先生は烈乃様の言うとおりにしていただいんですから」



「今日もいいつけ通りの可愛らしい女兒ショーツですわね。でもこれも脱がしてしましましょう」

烈乃が雛翔のショーツを刷り下ろすと、綺麗に皺の寄ったアヌスが露わになる。

「良かった。未使用みたいですわ」

「中古品でしたら、壊してしまおうかと思ってたんです。

これなら大事に扱ってあげますわ」

烈乃の声に雛翔は恐怖に怯える。

「動いたら危ないですからね」

「や、やめて……」

雛翔の小さな悲鳴も虚しく、烈乃は彼のアヌスに人差し指をゆっくりと差し入れる。

「んっ！……いい、いたいっ……」

「これぐらいで痛がってどうするんですか」



「処女でしたら仕方がないですわね。少し濡らして差し上げますわ」

烈乃はそう言うと、雛翔の口に、自分の人差し指を持つていく。

「よく湿らせなさい」

雛翔はその細くて綺麗な指を口に咥えようと、丹念にしゃぶる。そうすると烈乃のペニスを舐めさせられている時の事が思い出され、僅かにペニスを反応させてしまう。

「まあ、先生ったら何を想像されてらっしゃるの？」

烈乃はそうからかうと、顔を真っ赤にした雛翔のアヌスに今度は遠慮無しに指を押し込んだ！

「んっ！ー！！」

あまりの衝撃と痛さに悲鳴も上げられず、雛翔はお尻のその違和感に耐えるしか無い。





「すんなり入りましたわね。これならもっと太いのも大丈夫そうですね」

「はい、烈乃様。用意してありますわ」

雷愛はポーチからアナル用バイブを取り出すと烈乃に手渡す。

「や、やめて……そんな太いの無理だよ！」

たまらず悲鳴を漏らす雛翔だったが、もう二人の目は好奇心に溢れていた。

「さあ、挿れますからお腹の力を抜いて下さいね」

「いっ……いっ……いぎゃあっ！」

数珠式バイブの最初の一粒が押し込まれ、雛翔の叫び声が保健室にこだまする。

「まだ最初の一つですわよ。これくらいで降参されては困ります」

「いたいっ！ 抜いてえっ！」

一粒一粒、段々と大きくなるバイブの粒が腸内に押し込まれていき、その旅に雛翔は身を引き裂かれるような痛みをお尻に感じる。

「半分くらい入りましたわ。どんな気分ですか？お尻に異物を挿入されたご感想はいかがですか？」

「き、気持ち悪い……お願いだから抜いて……」

「あら、残念ですわね。では、こうしたらいかがですか？」

「あつ！ ああああああつ！」

烈乃がバイブのスイッチを入れると、雛翔のお尻の中でそれが蛇のようにうねる。

「いかがですか？ 気持ちいいですか？」

「あつ……ひいっ……んあつ！」雛翔には答えようが無い。

「見て下さい。この子、勃起させてますわよ」

だが、気がつけば彼のおちんちんはそのお尻の刺激に反応してしまっていた。

「これなら大丈夫ですわね。明日が楽しみですわ」

烈乃の謎の言葉を聞きながら、雛翔はその恥辱と違和感、そしてまだ自覚せぬ快感に必死に悶えるだけだった。



「や、やめてえ！ お願いだから！」

烈乃と雷愛にお尻を開発された次の日、雛翔は放課後の教室で机に縛り付けられていた。

「落ち着いて下さい、先生。優しくしてあげますから」

既に火照った表情の烈乃が指を舐める。

「そうそう。初めてが烈乃様だなんて光栄なんですよ」

雷愛がゆつくりと雛翔のスカートを捲り上げると、女児ショーツにくるまれた小ぶりなお尻が露わになる。

「今日も可愛いお子様ショーツ、似合ってますわよ。それ、実は私のお下がりなんです」

「雷愛ちゃんのお下がり？」

「雷愛さんでしょ。どんな時でも男子は女性に敬語って将奈先生に教わらなかった？ 今まではあえて許してあげてましたけど、これからは厳しく躰けますからね」



「さあ、私が幼稚園児の時に穿いていたショーツ、ぬぎぬぎ
しましようね」

雷愛は幼児に言うようにして、雛翔のショーツを下ろす。
「なあんだ。雷愛のお下がりのパンツだったんだ。通りで少
女趣味だと思ったぜ」

ボーイッシュな虎子が笑う。

「でも先生にはびったりだな。こういうの昔は『女々しい』
っていったらしいぜ」

「今では女々しいとか女みたいとか言うのは褒め言葉です
ものね。どう先生？ 教え子のお古のショーツを脱がされ
て今から犯されるご気分は？」

「や、やめて……お願い……こんなことされたら僕は……」

「大丈夫ですわ。立派な教師になるために、これも経験
ですから」



「そ、それってどういう意味!?!」

「まだ気がついていなかったんですか? 先生は教育実習に来たつもりだったのかもしれませんが、実は違うんです」「そ、そんな!?!」

「先生は只の教材なんです。私達に女尊男卑を教え込ませる為の生きた教材です」

「まさか!」

「そう思います? じゃあどうして先生みたいな身長も体重も私達より小さくて、腕力も知力も生徒達より劣っている男子が実習に採用されたんですか?」

「そ、それは……」

それは雛翔も何度も不思議に思った疑問だった。だが彼はそれが努力が認められた結果だと思おうとしていたのだった。



「現にこうやって、私達にペニスの大きさを屈服し、知力で負け、腕力で蹂躪されて今まさに心まで犯されようとしているではありませんか」

「そ、そんな事……」

「そんな事あります。先生、あなたが私達に一つでも勝っているところがあるのですか？ 昔は男の人がこうやって力尽くで女性を犯していたと聞きますが……今から新しい時代の女男関係というのをたつぷりと教えて差し上げますわ」

「ひ、ひいつ！」

烈乃がアヌスにペニスの先をあてがったので、雛翔は悲鳴を上げる。

「いいですわ、いいですわ、その声。その声を聞いているだけでほら、益々固くなってきましたわ」



「ほおら、入りますわよ」

「い、いたいつ！ いたいつ！ おつ！」

烈乃の亀頭が雛翔のアヌスに押し込まれ、彼はたまりきれず足をばたつかせる。

すかさず雷愛がその足を押さえつけた。

「ほら、じつとしてなさい。動くと危ないわよ。お尻の穴を壊されて一生オムツがいい？」

「いやああっ！」

「なら大人しく犯られていなさい。ほら。今烈乃様のペニスが先生のお尻に吸い込まれていくわよ。ありがたく受け入れなさい」

「い、いたいつ！ いたいつ！ ぬいてえっ！！！」

烈乃の巨大なペニスに貫かれ、雛翔は泣きながら悶える。

「さあ奥まで全部入りました。先生の中気持ちいいですわ」



「教え子の女の子に自分より大きなペニスで無理矢理犯される気分はいかがですか？ さあ動きまますよ！」

烈乃は雛翔のお腹の中で更に勃起した陰茎を前後に動かし始める。アヌスを擦られ、お腹の中をかき回される感触に雛翔は悶絶した。

「ひぐっ！ うえっ！ うあっ！」

「まあ、はしたない声。女の子の服を着せてもらってるんですからもうちよつとたしなみを持って喘いで下さいな」

「ああん。気持ちよさそう。あたしも早く犯したいっ！」
「明日は焰香さんに回して差し上げますから、今日は我慢して下さいな。ううっ！」

烈乃は一瞬だけ苦悶したような表情になると、更にピストン運動を強くする。

「先生の中、本当に気持ちいいですわ。今から出してあげますから、私の子種を十分に受け取って下さいね」



「まあ、烈乃様に中出し頂けるなんて羨ましい。ほら、感謝のお願いはどうしました？」

「そ、そんな……」

「言わないといつまでも出してあげませんわよ。それともっと突かれていたいのかしら？」

「い、言います！言います！ ぼ、僕のお腹の中に、れ、烈乃様の精子を注ぎ込んで下さいませえ！」

「よく言えました。じゃあ受け入れなさい！」

「あぎいおあつっつ！」

射精直前の一段と勃起した陰茎に奥を突かれ、雛翔はそのまま気絶してしまった。

「中々に気持ちよかったですわ。男子の癖に、こんなに女性を喜ばせる事ができる光栄に感謝しなさい」

抜き出した陰茎を雷愛に拭き取らせながら、烈乃は満足そうにほくそ笑んだ。



更に翌日、雛翔は将奈から家庭訪問の実習を言いつけられた。

「ぼ、僕一人で行くんですか？」

「当たり前だ。それともお前、教え子が怖いのか？」

「からかうように言った将奈は昨日の出来事も恐らく知っているのだろう。」

「分かりました。でも……でも、この格好で行かないといけませんか？……」

「言わないと分からないか？」

将奈がゲンコツを握り締めた為に雛翔は慌てて学校を飛び出した。

今日の彼はピンク色のプリントTシャツに、裾にイチゴ柄のついた黄色のスカート、足下には水色のハイソックス。

頭にはスカートと同じイチゴモチーフのヘアバンドを付けられた愛らしい姿だ。もちろんいざれも女兒用のものだ。



女兒服で街を歩くのはとても恥ずかしかったが、雛翔の見た目では誰も不審にさえ思わない。それが又彼の羞恥心をちくちくと刺激した。

やっとの事で焔香の自宅に辿り着いて彼は驚いた。

焔香が下着姿で彼を出迎えたからだ。

「先生、早く犯ろうよ！」

そういえば、ふたなり三人の中で一番性欲が強いのは焔香だと聞いた事を雛翔は思い出した。

「ほら、私の部屋はこっちだよ！」

焔香は雛翔の手を引いて自分の部屋に連れ込むと、可愛らしいベッドの上に彼をたちまち押し倒してしまった。

「わたし、男子を犯すのは初めてなんだ♥」

「ま、待って！ 僕はこんなことやりにきた訳じゃ！」

「何ウブな事言ってるんですか。先生だって、犯られるの覚悟で来たんですよ。こんな可愛い格好しちゃってさ」



「こ。これは将奈先生に言われて……」
「いいのよ。私、そんな風な可愛いお洋服が大好きなの。
もちろん先生みたいに可愛い男の子も」

焰香は雛翔の女兒ショーツを脱がすと、腰から下を軽々と持ち上げて、アヌスに自身の陰茎をあてがった。

「ほらこんなに軽くてまるで小さな女の子みたい。そう思うと低学年の子が背伸びした服装みたいで、もっともっと可愛く思えてきちゃう。雷愛ちゃんも昔はよくやらせてくれたんだけど、最近あの子も大人になっちゃったから」
語りながらも焰香はペニスの先で雛翔のアヌスをほぐし続け、やがてカウパーでどろどろに塗れたその場所に己のペニスを突き入れた。

「んっ！ んんっ！」 雛翔はくぐもった声で嗚咽する。

ここは教室などでは無く、焰香の家なのだ。家人にこの場面を見られたら大変な事になってしまう。

そう思って彼は口に手を当てて喘ぎ声を抑えた。



だがそんな努力も虚しく終わる。

「あら、もう始めちゃったの」

気がつけば、ドアを開けて一人の女性がお盆に載せたジュースを持っていた。

「初めまして。焰香の母です。娘がいつもお世話になっております。まあ、聞いていた以上に可愛らしい先生です。失礼ですけど、本当に男の人なんですかあ？」

「あつ！ ああつ！ こ、これはあああつ！」

必死に言い訳しようとする雛翔だったが、興奮した焰香に突かれる度に予期せぬ喘ぎ声が勝手に口から漏れて、上手く話す事もできない。

「それにしても、焰香も立派になったわねえ。年上の男子をこんな風に扱えるなんて。お母さん嬉しいわ。出来たら混ざりたいくらい♡」



「だ、だめよ、先生は……この子は今日は私のものなんだから」

「はいはい。取りませんよ」

焔香の母親はにこやかにそう言うと、二人に近づいて雛翔の足を横に伸ばす。

「ほら、焔香ちゃん。こうすればもつと奥まで入るのよ」

「ほんと？ママ」

焔香が言われるままに体を少し回転させると、股間が更に密着して雛翔はまるでお腹の奥にまでキュウリでも押し込まれたかのような圧迫感を覚えた。

「く……くるしいっ……」

烈乃ほどの太さは無いが、長さがある焔香のペニスは容赦無く雛翔の膣の裏まで突いてくるようだった。

「そうそう。上手いわよ焔香ちゃん」



「も、もう出そう！」
「待って、焰香ちゃん。男子には出す前にする事があるでしよ」

「あつ、そ、そうだった。雛翔、私に中に出して欲しいってお願いしなさい。出来るだけ淫猥にね！」

「そうそう。男子と目する時には屈辱感を与えないといけないの。よく覚えてたわね」

「ほら、早く言わないと出ちゃうでしょ！」

「ほ、ほのかか……ちゃん……いえ、ほのか様……」

雛翔は仕方無く恥ずかしい言葉を口にした。

「あ、あたしのいやらしいオスマンコに焰香様のぶっといペニスをぶち込んで頂きありがとうございます。ど、どうか哀れなこの雛翔のお腹に焰香様の精液を注ぎ込んで下さいませ！」



「んふふ、可愛いわよ先生。望み通りたっぷりと出してあげる！」

雛翔の哀願に更に興奮したのか、焰香はこれ以上ないくらい勃起した陰茎から大量の精液を撒き散らした。

「あつ！... いやあつ！ お腹が膨れちゃう！」

あまりの量の精液にお腹がぱんぱんに膨らむような感覚を覚えた雛翔は本当に女の子になった気分になってしまった。

「これだけ一杯出されたら、先生妊娠しちゃうんじゃないですかあ？」

母親にそう言われ、雛翔は自分が勃起してしまっている事に気がついてしまった。

「やだ先生、焰香に妊娠させられる想像をして興奮しちゃたんですか？」

「先生ったら、可愛いっ！ もっと犯してあげる！」

結局この日、雛翔は焰香に八回犯され続けた。



「雛翔、今日は部活の顧問の実習だ」

次の日、雛翔は将奈に言われてチアガール部を訪れた。「あ、あの……僕、チアなんて全然分からないんですけど」「知ってますよ。あたし達が手取り足取り教えてあげますから」

雛翔は否応無くチアの衣裳に着替えさせられると、下の学年の小さな子達に混じってチア応援の練習をさせられてしまった。足を上げたり、手を振り上げたりする可愛らしい仕草を彼は教え子に指導されながら必死に練習する。

チアの衣裳は今までの女兒服とはまた違った恥ずかしさを雛翔に感じさせる。今では男子の応援をする事などは無いが、露出が多く、捲れる事が前提のミニスカートはやっぱり男子である雛翔には辛い。

だが、この日の本当の顧問研修はこれからだったのだ。





「虎子先輩が試合されるんですって！」

一人の子がチア部に駆け込んできて、あっという間に雛翔は体育館に連れて行かれてしまった。

中ではボーイッシュなふたなり娘の虎子が柔道の対外試合を行っていた。

「ほら、雛翔先生。先輩を応援して！」

チア部の生徒達に言われ、雛翔は仕方無く覚えたばかりの振り付けで虎子の応援をする。

「がんばれがんばれ虎子先輩！」

「おっ！ 先生見に来てくれたのか。チアの衣裳似合ってるぞ。しっかり応援してくれよな！」

「は、はい！ ふれーふれー 虎子せんぱいっ！」

「雛翔、パンツ見えてるぞおっ！」

遥かに年下の女の子をチア衣裳で応援させられるという恥辱に塗れた雛翔だったが、彼の出番はこれからだった。

「雛翔、稽古つけてやるよ。男子だから少しはできんだろ」
「い、いえ……僕は全然……」

「昔は男子は柔道が必修だって聞いてるぞ。遠慮せずに本気でかかってこいよ」

柔道が必須だったのはもう何十年も前だ。それを知っていて虎子は雛翔を誘ったのだ。

「なんだよ、大人の癖に全然力ないじゃん。それでも大人の男かよお」

こんな時だけ旧時代の男扱いして虎子は雛翔を辱める。
「あつ、もう始まってますわ」

その時、見慣れた三人の人影が体育館の端に現れた。
烈乃、雷愛、焰香の仲良しグループだ。

「あら雛翔先生、ひよつとしてスポーツでも私達に勝てないのかしら？ 一体なんだったらお出来になりますの？」



「おらっ！」

組み手の状態から、あつという間に雛翔は畳の上に転がされる。只の腕力だけでも敵わないのに、柔道の技をかけられたりすれば抵抗すらできる筈も無かった。

「ホント弱っちなあ。なあ先生、俺に負けた男はどうなるか知ってるか？」

押さえつけられながらぶるぶると首を振る雛翔。

「そんな短いスカート穿いて、神聖なこの道場に来てるんだ。おおよその覚悟はできてるんだろ？」

虎子はそう言うと、雛翔の足を持ち上げ、チア衣裳のスカートを捲り上げる。

「烈乃と焰香にはもうさせたんだろ。俺にも犯らせろや」興奮した面持ちで虎子に耳打ちされ、雛翔はもう抗うことも出来なかった。



虎子は雛翔の穿かされている女児ショーツをたちまち下ろしてしまおうと、既に勃起していたペニスの先で雛翔のお尻をまさぐり始める。

「どうだい、格闘技で年下の女に負けて力尽くで犯される気分は？ 一昔前だったらこんなの考えられ無かったんだろうな」

虎子はそう言いながら、雛翔のアヌスに陰茎を押し入れた。

「んんんんっ！」

「おつ、意外と簡単に入ったな。烈乃と焰香に広げられて、ガバガバになっちまったんじゃないの？」

「酷いですわ虎子さん」という声が遠くから聞こえる。

「俺のが小さいなんて言うなよ。お前の包茎赤ちゃんちんちんに比べたら、天と地くらいの差があるだろ」



「ほら言えよ。僕の赤ちゃんちゃんなんて比べものにならない虎子さんの大人おちんちん気持ちいいですって」
「そ、それは……」

「もう勃起させといて生意気言うなよ。雛翔もこうされるのが気持ちいいんだろ。沢山の女の子に見られながら、女の子に犯されんのが、快感なんだろ。素直になれよ」
気がつけば雛翔のペニスもう限界寸前だった。

そうなのか……僕はこうされたかったんだろうか……

「は、はい！ 僕の包茎で短小な赤ちゃんみたいなおちんちんじゃなく、立派に剥けていて逞しく雄々しい虎子さんの大人ペニスで僕のオスマンコを犯して下さい！ そしてあたしを妊娠させて下さい！ 虎子さんの赤ちゃん産みたいのおっ！」

「よしよし、可愛い奴だな。今から孕ませてやるからな」
「うん、お願い。あたし女の子になりたかったのかも！」
虎子に貫かれ、雛翔も同時に絶頂を迎えた。



「こんなに早く陥落するとは思いませんでしたわ」

「それだけ俺のチンポが良かったんだろ」

「いえいえ、最初に犯した私のが忘れられなくて……」

「私が八回も犯ったから病みつきになったのよ」

「まあまあ、みなさん。折角新しい友達が出来たんですもの。仲良くして迎えてあげましょう」

虎子に犯されてあられもない告白をしてしまった雛翔は今更乍ら教師失格とされたが、烈乃の特別の計らいにより英雀女子△学校の一生徒として研修を続ける事になった。雛翔自身はまだ教師の夢を捨てきれなかったが、彼が女の子としての幸せに目覚めてしまったのも事実だった。

このまま男子として生きていけば惨めな人生しかありえないが、『名誉女子』という女性の為に奉仕する女の子のような男子という地位を得れば、彼も男子としてはそれなりに幸福な人生を歩める可能性があったのだ。



もちろんそれは女性の為に尽くす女の子のような男子という立場でしか無かったが、うまくすれば教師の補佐くらいにはなれるという。
雛翔がその誘いを断る理由は無かった。

「焰香、また胸がおっきくなったなあ」

「虎子は相変わらずね」

「俺はいいんだよ。柔道の時に邪魔になるから」

今日は新学期になって恒例の身体測定である。焰香や虎子といった元雛翔の教え子達と共に、雛翔は一人の生徒として保健室に連れてこられた。

男子の自分がこんな場所においてもいいのかと思うような光景だったが、どの子もそれを気にする様子も無い。
それくらいこの時代の男子は軽々しい存在だったのだ。





「雛ちゃん。今日も可愛い下着ね」

「はい、烈乃お姉様、ありがとうございます。雛翔はこのプリティマジックっていうアニメが大好きなんです」

「そう。でも雛ちゃんももう四年生なんですから、少しは大人っぽい下着にしましょうね」

「はい、お姉様。今度雛翔にコーディネートして下さい」

「んふふ、本当に可愛い娘」

雛翔は烈乃はもちろん、他の生徒達を『お姉様』と呼ぶように命じられていた。皆、彼より先に女の子だったというのがその理由だ。

加えて彼は出来るだけ可愛らしい女の子の振る舞いや言葉遣いをしなければならぬ。

二年後、△学校を卒業した彼が名誉女子になれるかは烈乃のその判断に一任されているのだ。

「さあ、診察してもらいましょうねえ」

烈乃は女医の前の椅子に座ると、自分の膝の上をぽんぽんと叩いた。

「し、失礼致します。お姉様……」

雛翔はおずおずと烈乃の膝の上に座ろうとする。

すると熱くて固いものが彼のお尻に当たった。

「あら、私とした事が。雛翔があんまり可愛いから勃起してしまいましたわ。雛ちゃん、パンツをずらしてから座ってくれる？」

どうしろと言われているのかは明白だった。雛翔は顔を赤くしながら穿かされているアニメプリントの女児ショーツのクロッチ部分を横にずらすと、アヌスの位置を合わせて烈乃のペニスに身を埋めていく。

「あっ……あぁっ……んあっ！」





「先生の前ではしたくないですわよ。雛ちゃん」

「は、はい、ごめんなさいお姉様」

「さあ先生、検診をお願いしますわ」

女医はおずおずと身を乗り出す。彼女も烈乃の地位を知っているのか、驚きもせず黙々と職務を遂行し続けた。

「では、ペニスのサイズを計りましょうねえ」

女医は雛翔のペニスに定規をあてる。

「よん……いえ、3センチ強ね。大体ふたなりの女の子の幼稚園年少さんくらいの大ささかしら。まだ剥けてもないし、完全な発育不良だわ。一度専門のお医者様に見て頂いた方がいいかもしれないわね」

「分かりました先生。でも雛ちゃん……妹はまだ女の子になり立てですから、もう少し様子を見てあげようかと思ってるんです」

「それにほら……」

烈乃は少し腰を動かして、雛翔のアヌスにペニスを更に深く押し入れた。

「いやあっ！」

「ほら、こうすれば少しは大きくなるんですわ」

烈乃の言うとおりに、お尻を刺激された雛翔のペニスは包茎ながらもほんの少しだけ勃起する。

「もう一度計るわね……うん、4センチ弱……おまけして4センチにしてあげるわね」

女医は健康診断の結果に書き込みながら苦笑いする。

「良かったわね雛ちゃん。これで幼稚園年長さんくらいのおちんちんになったかもね」

「は、はい。あたし幼稚園年長さんくらいのおちんちんになれて嬉しいです、お姉様」

こんな時でも言わされる恥ずかしいセリフに、雛翔は頬を染める。



「でももうちょっと頑張りましょうか。ほら、ここをいじつたらもっと大きくなれるんじゃない？」

烈乃はそう言っていると、雛翔のアニメプリントのスリーマを捲り上げ、露出した乳首を両手で摘む。

「やだお姉様！そこは駄目え！……」

「んふふ、雛ちゃんは男の子だったのにここが感じるのね。先生どうですか？」

「そうねえ。四年生にしては貧乳過ぎるわねえ。でもそうやってお姉さんがいつも刺激してあげたら少しずつ大きくなるかもしれないわね」

「そうですか。良かったわね雛ちゃん」

「はい。雛翔、烈乃お姉ちゃんみたいに大きなおっぱいになりたいのお。でなきや立派な女の子に……ああつ！」
烈乃に胸とアヌスを刺激され、雛翔は悶え苦しむ。





「ほら頑張りなさい。立派な女の子になりたいんですよ！」
烈乃は座ったまま腰を動かす。突かれる度に雛翔は嗚咽と喘ぎ声を交互に漏らす。

「せ、せんせー、あたし、雛は烈乃お姉ちゃんが大好きなんですう！ ああっ！ 烈乃お姉ちゃんのおちんちんがあたしの中であばれてるう！」

「雛っ！ 雛っ！ 可愛い私の妹の雛ちゃん！ 一緒にいくわよ」

「はいっ！ お姉様！」

雛翔と烈乃はそのまま同時に射精してしまった。

「先生、あたしお姉様の赤ちゃんを産みたいんです」

「私も雛ちゃんを孕ませたいんです。本気で……」

「そうね、最近はそういったケースもあるみたいだから私から烈乃さんのお祖父さんに紹介状を送っていただくわ」

数か月後、雛翔はすっかりと英雀女子△学校の一員となっていた。

「みなさん。今日はお天気がいいですから、校内をお散歩しましょうか」

その日、雛翔達は烈乃に誘われてお昼休みに教室から連れ出そうとされていた。

「烈乃様。雛ちゃんにはこれをつけないと」

雷愛が犬用のリードを烈乃に手渡す。その先には首輪にしては小さすぎる輪っかがついていていた。

「そうでしたわね。名誉女子見習を散歩させる時はこれをつけるのが決まりでしたものね。雛ちゃん、スカートを捲り上げなさい」

「はい、お姉様」

雛翔は嬉しそうに言うと、自らスカートを捲り上げた。



「すっかり従順になりましたわね。教育実習に来られた当初からは考えられませんわ」

「あの時のことを思い出すと本当に恥ずかしいです。男子のくせに先生になりたいなんて、おこがましいにも程がありました。烈乃お姉様や今ここにいるお姉様方達に厳しく躰けられていませんでしたら、今頃雛は去勢されて矯正所に入れられていたかもしれませぬもの」

「でも、髪も伸びていまや本当にこの学校の生徒みたいだもんね」

「いえ、焰香お姉様。雛はこんな格好をさせて頂いてますけど、やっぱり男子なんです。これからも皆様方の言いつけを守って立派な名誉女子を目指しますので、どうかいつでも雛のオスマンコを性欲処理にお使い下さい」

「雛ちゃん分かってきたねえ。じゃあ後でトイレ行こ♥」



「焰香は相変わらず年中発情期だよなあ」

虎子がそう言つて笑う。

「それよりさあ。俺今度柔道の全国大会に出るんだ。そんな時にはみんな応援に来てくれよ。雛はもちろんあん時のチア衣裳でポンポン振ってくれよな」

「あ、あたしがですか?」

「おお。テレビ中継もあるらしいから、全国の人みんなに雛の可愛い姿見てもらえるぜ」

自分が年下の女の子をチアガールの姿でポンポンを振つて応援する姿が全国中継される……足を上げたりしたら可愛いパンツも何十万人もの人に見られてしまうかもしれない。そう思うと雛翔はなんともいえない胸の鼓動を感じてしまった。

「おい雛翔、お前ちよつと勃起してるだろ」



「そうなの雛？ ちょっと見せてみなさい」

烈乃がリードを引っ張ると、雛翔のスカートが捲り上がり、その先に繋がれ縛られた小さなペニスが露わになった。

「ホントだ。ちよつと勃起してるわね。自分の可愛い姿を大勢の人に見られる事を想像して興奮してきちゃったんでしょ。雛もすっかりマゾ男子になっちゃったわね」

雷愛にからかわれ、雛翔は苦笑いする。

「勝手に勃起するなんて悪い子ね。これはお仕置きが必要かしら」

「い、いたいですわっ。お姉様、お許し下さい」

烈乃にリードを引っ張られた雛翔が悲鳴を上げる。

「ホントかよ。さっきより大きくしてるくせに」

虎子が雛翔のペニスを見て笑った。



「ホント旦那子に育っちゃったわね。ところで、お腹の具合はもう大丈夫なの？」

烈乃に問われた雛翔は嬉しそうに答える。

「はい、手術の後も残りませんでしたし、お医者様はもういつでも受け入れる事が出来るって……」

「そっかあ。アレももう来てるのか？」

虎子が興味津々で聞いてくる。

「はい。初潮でしたら先週に来ましたので、烈乃様のお家でお赤飯を炊いて頂いて、ご馳走になったんですよ」

雛翔のお腹には人工培養された子宮が移植されたのだ。

この時代、仕事に忙しい女性の代わりに男子が出産することはそう珍しく無かった。

「あたし、早く烈乃様の赤ちゃんを産みたいです……」
雛翔はふとそう呟いてしまった。





「おお、妬けるねえ。俺の子供を産みたいって言ってたのは嘘だったのかよ」

「私の赤ん坊も産みたいって言ってたわよね」

「そ、それは……」

虎子と焰香に虐められ、雛翔は言葉に詰まった。

「私の赤ちゃんを出産した後でしたら、皆様にお貸ししてもいいですわよ」

「そ、そんな……物みたい……」

「あら？ 雛ちゃん勘違いしてない？ ちょっとこの学校に馴染んできたからと言っても雛ちゃんは男子。私達の所有物なんだから、その立場は忘れちゃだめよ」

「は、はい……でも雛はやっぱり烈乃様の……」

「分かってるわ。だから私が一番最初に種付けしてあげるって言ってるのよ。その前に他の子の身をこもったら許さないから！」

珍しく興奮した様子で烈乃は言った。

「おっ！ 烈乃が赤くなってるぞ。雛、お前本当に愛されてるな」

「ほ、ほっといて下さいませ！」

照れる烈乃の顔を見て雛翔は本当に幸せを感じていた。「じゃあその後は雛はみんなの共有物だな。卒業したらみんな一緒に住んで朝から晩まで犯すつてのはどうだ？」
「朝から……夜まで……二十四時間……」

「そうだ。雛は肉便器として、俺たちがしたくなったらすぐにケツマンコでも口でも言われた通りに奉仕する。もちろんゴムもつけないから妊娠しても誰の子かも分からないかもな。みんなで育てようぜ」

「それもいいわね。私は性欲高いからそれだと安心だわ。まずは朝起きたら目覚めのフェラ奉仕ね。上手くしゃぶれなかったらオシッコも飲ませてあげる♥」

「お、おしっこ……ですか」

「裸エプロンで朝ご飯を作らせながらバックから犯すのもいいなあ」

「昼間は家事と赤ちゃんのお世話ね。そのうち豊胸して、お乳も出るようにしてもいいわね」

「お乳……ぼくのおっぱいから……赤ちゃんが雛の乳首を吸うの？」

「そう、それで興奮したら子供の前で犯してあげる。私達の気の向くままにね」

「そ、そんな……そんな風に一生肉便器やオナホールみたいにされるなんて……」

「あれ、雛ちゃん出そうじゃない」

気がつくくと、雛翔の縛られたペニス先は先っぽからだらだらとカウパー液を垂れ流していた。

「さては雛、自分が肉便器にされる事を想像して興奮しちゃったなあ！」

「雛は本当に淫乱ね。罰として今日は私の家でたっぷり犯してあげる。本当に種付けしてやるつもりで奥までガンガンついてやるから覚悟しなさい」

「あっ…ああっ…今日にも…：…僕が…：…烈乃様の赤ちやんを…：…うあああんっ！」

それを想像した瞬間、雛翔のペニスからだらだらと精液が流れ落ちた。

「私の子を妊娠する想像でイっちゃうなんて、はしたないにも程がありますわ」

「はいお姉様。でも僕…：…雛は本当に嬉しくって…：…」

「そのセリフは名誉女子になって、本当の母親になってから口にしなさい」「はい、お姉様！」

思い描いていた未来とは違ったが、沢山の笑顔に囲まれ、雛翔は今幸せだった。

